

春燈

February 2015

2 月号



主宰の句

安立公彦

禾汀亡きこの地を巡る冬日かな

(川崎民家園二句)

炉明りに育つ人情濃かりけり

大川の名残を今に都鳥

懐に人ごゑを容れ山眠る

南天の実や安心の朱を挙る



久保田万太郎の句

炭の香のなみださそふや一の替

『道芝』 昭和二年

季語別の第一句集『道芝』では二十四番目の句であるが、後の『草の丈』では巻頭の句。実は『道芝』では「火鉢に炭をつぎながら『初曾我』の句を案ず。えず。」の前書がある。全句集に「初曾我」の句は見当たらないが、小説「市井人」の中で「初曾我や五郎が袖の緋ぢりめん」とある。初芝居の場面に思いを馳せながら深く感動されたのだ。この句は私の最初の暗誦句でもある。

木村傘休

久保田万太郎の句

一生を悔いてせんなき端居かな

『流寓抄以後』昭和三十八年

掲句は万太郎が急逝する四年前の作。「ある日、ある時……」の前書がある。公には地位も名誉も既に文化勲章を授かるまでになっていたが、私生活の面では妻子との死別等苦渋の連続であり、まさに流寓の身であった。その様な状況のなかで、端居しつつふっと己の心境…本音を吐露したのだ。作句信条の「形あってこそその影」を身を以って実践した類なき俳人であった。

小泉 貴弘

燈下集



○ 金山雅江

落葉掃くゴーギャンの赤ゴッホの黄
好事家のつどふ古書店文化の日
茶の花や隣家にやつと嫁が来る
負けん気の声の張合ふ木の実独楽
婿殿をねぎらふ勤労感謝の日

○ 太田佳代子

戻るには遠き道のり冬木立
丁寧に雲暮れてゆく冬の山
着ぶくれて『解体新書』立ち読みす
しつけ糸抜いて勤労感謝の日
いつか散るための木の葉の重さかな

○ 荻野嘉代子

手が届くところに日がさす日向ぼこ
茶の花や厨灯せば見失ひ
蒲団干すその先にある賤ヶ岳
冬服や皆帰り道急ぐごと
歳末や仏壇にある宝籤

子の見する薄き松茸幕の内
境内を過る母子や神の留守
人力車なべて物見や一葉忌 (浅草二句)
奥山の店のやりとり冬ぬくし
落葉焚何やら昔見えてきし

○ 久保久子

己が命おのれが抱き今朝の冬

冬ともし厨の甘き匂かな

山襲の深まる影や木守柿

枯葉舞ふ終焉の地の定まらず

大枯野この身ひとつの置き処

○ 廖 運 藩

放れ馬途方に暮るる初時雨

時雨るるや動くとも見えて沖の船

時雨るるや角が重荷の牛の老

甘蔗刈るへつぴり腰や農の裔

甘蔗嚙む二代相伝乱杖齒

○ 生 方 義 紹

アイロンに残るぬくみや秋深し

もらひ手のなき榎植の実香りけり

スニーカーの聲音ひそと花八手

柁の花拔道をたがへけり

場末なる馴染の店や夕時雨

○ 久 米 憲 子

紅白の水引草や幸よ来い

夫の星と決めてしばしの星月夜

空抜くる十一月や男の子生る

手に受くる綿虫風の攫ひけり

良き夢を見むとて叩く干蒲団

○ 小 倉 陶 女

からつぼの郵便受や日短

よろめきて己が影ふむ冬日かな

酉の市風のぬけうら戻りけり

あけすけな女の会話闇夜汁

黒白をつくるマスクをはつしけり

○ 荒 井 慈

助手席の白寿の母や菊日和

撰取不捨雨の十夜となりにけり

白鳩や源平池の初氷

神の留守話大きくなりけり

歳晩やお色直しの段葛

当月集

安立 公彦選



○ 西岡啓子

帰り花空の青さに咲き出でし

小春日や夕爾をおもふ水ぐるま

しぐるるや町に馴染の喫茶店

とび石に雨のなごりや青木の実

束の間の路地の夕映え冬の蝶

○ 中村紀美子

雨の夜の葱の甘さや独り鍋

湯の町のはや冬めける旅衣

曇り日をほのと灯して帰り花

黙やぶる若人の声冬の朝

ぬくき日は翅を小振りに冬の蝶

○ 浅木ノエ

屋根に咲く冬のたんぽぽ深山晴

柿すだれ峡の弱日を集めけり

節穴より差入る光冬の鵲

指狐大きく跳ぬる樞火かな

ふるさとの闇の匂や楯燃ゆる

○ 藤丸誠旨

葱の香のわれの立派な鼻を打つ

硬き骨もちて生きたく海風かな

湯豆腐やぼつりと語る遠き恋

酒場出で寒夜の底の影となり

刀折れ矢尽きて暮るる枯蓮

○ 懸林喜代次

天高く貧しきものを干しにけり

妻やさし酒うまし勤労感謝の日

葱買ひに急ぐ道沿ひ葱畑

鍵隠すポインセチアの緋の中に

寄鍋や青年意外に鍋奉行

春燈の句

安立 公彦選

古民家の二十三棟山眠る

神奈川 石田 康明

燻されて旧りし囲炉裏の火天かな

百葉に勝る良句や霜深し
冬至南瓜シンデレラ馬車の選にもれ

次世代へ榾火をつなぐボランティア

ふきん干すや冬日啄む庭雀

聞こゆるは縄縷ふひとの子守唄

まだ見ゆる皇帝ダリア冬夕焼

しぐるるや箸に重たき胡麻豆腐

東京 那須 礼子

忌に籠り一人の落葉焚きぬたり

母遺愛の大島紬肩蒲団

ひとり膳心ほぐすや土瓶むし

晩年の光陰のはや冬至粥
ひそやかな雨音を聴く師走かな

夫といふ灯を失ひし寒さかな

寧日や切干大根母をまね

どの顔も幸せばかり鯛雲

神奈川 葦原 霞切

今泣いた懸巢の笑ふ里の暮

我が庭は紅葉の山に劣らざり

身辺の整理ぼつぼつ落葉焚

雑司ヶ谷のここもまた路地石路の花

小春日の鳶と鴉の鬼ごっこ

帰途の坂夕日まばゆき冬木立

楓もみぢ有終の彩かざしけり

埼玉 茂木 なつ

たたなはる赤城全谷冬に入る

火の国の重き荷ざぼん届きけり
冬薔薇ひとみて階下しづかなり

東京 坂本依誌子

埼玉 原田たづえ

千葉 廣瀬 克子



余言

安立公彦

冬帽に手をかけ応ふ鶴来しし

片桐てい女

十一月本部句会で特選に頂いた句。渡辺鶴来さんが逝かれたのは、平成二十三年四月二十八日だった。大分以前に亡くなられた様な気がするが、まだ三年と半年。八十七歳だった。同年八月号に、松橋利雄さんと、三宅文子さんの行き届いた追悼文が出ている。改めて読み返し、得るところが多かった。松橋さんの文章にある、「戦中、知覧飛行場の整備に就いていた」こと、三宅さんの言つ、「少し悪で、シャイで、そこが恰好良かった」など、在りし日の、鶴来さんの面影が彷彿とする。

この句、そういう鶴来さんの、「冬帽に手をかけ応ふ」姿を、てい女さんはい最近のこと、と見て作られた思いが伝わって来る。改めて惜しみても余りある先輩だった。

心柱たり得しをとこ実南天（追憶・禾江さん） 上山 永晃

「心柱」は、仏塔などの中心に立てる柱。当然塔の荷重に耐える強さが必要である。

今年の神奈川支部大会は、六月五日に逝かれた小島禾汀さんの追悼句会となった。会場に置かれた禾汀門の皆さんが集めた遺品の資料が、一際目を惹いた。句会では禾汀さんを悼む句が多かった。今改めてそれらの句を見ると、故人への哀惜の思いがどの句にも溢れている。そういう中でこの句は、故人の一門を統べる実行力を、心柱に託して詠んでいる。直載な表現の鮮やかな追悼句である。

『森谷達三遺句集』を得て師走

滝沢 幸助

森谷達三さんを知る人は、会津以外では余り多くはなからう。私も二年前、天寧寺句会に参上した時が最初で最後だった。しかし出合いは数ではない、質である。その折の達三さんの印象は今も忘れられない。

この遺句集は、滝沢さんの熱意と多大のご苦勞があつて出来たと云つてよい。遺句集第二部の、「しのぶことば」には、佐藤信子、三下程子お二人の弔文と、滝沢幸助さんを始めとする、句友、朋友、親族の皆さんの、切々とした偲ぶ言葉が載っている。私も序文を書かせて頂いた。

この句、「得て師走」に、作者の達三さんへの思いと、

遺句集を霊前に捧げるといふ安堵の思いがよく出ている。

夕爾生誕百年の秋逝きにけり 鈴木 直充

木下夕爾の生年は大正三年、今年（平成二十六年）は生誕百年に当たる。作者は晩秋のひと日、夕爾生誕の地福山を尋ね、ゆかりの跡を巡った。没後四十九年、大方の地は変貌しているが、夕爾の俳句、夕爾の詩が今も色褪せないように、生誕の地に件つ作者に、夕爾の「うたごころ」は鮮明に映じたことだろう。

この句を十一月本部句会で特選に選んだ日の夜、書架から『定本木下夕爾句集』、『定本木下夕爾詩集』を取り出し、風邪気味の卓上で、暫し読み耽ったことである。

本捨つる心の痛み漱石忌 大室恵美子

「断捨離」という流行語がある。不要な買物を断ち、不要な物を捨て、物への執着から離れること。しかし「本」は「物」ではない。それは心に通うもの。この句の「心の痛み」は本心から出た言葉だろう。恰も十二月九日は「漱石忌」。この句に適う季語はこれ以上には考えられない。

古民家の塀に影曳く冬の蜂 小嶋 恵美

先述の神奈川支部大会は、生田緑地の「日本民家園」を

主吟行地として催された。幾多の佳句が出て、選にも時を要した。それらの句の中で、この句の確かな「写生」が目惹いた。この句は、遠隔の地から解体移築された民家の情況を詠まず、その「古民家の塀」に翅を休めている一匹の「冬の蜂」を対象としている。

中七の「影曳く」がいい。おそらくそのまま死に至る蜂だろう。影曳くという表現にその蜂への憐情が読みとれる。

枯れきつて影のやすけき芒かな 三宅 文子

所謂、枯尾花である。古俳句の大方はこの季語を使っている。西行、定家の歌にも出てくる。尾花は芒の花穂。

この句、「枯れきつて」、その尾花を風に揺らしている枯芒を、「影のやすけき」と詠んでいる。みごとな表現である。十一月本部句会の折、講評で、「(枯芒)の、風景に溶け込んでいる姿は実に詩的で、意志ある存在のように見える」と鑑賞したが、その思いは変わらない。

山茶花やすれちがふ子に日の句 岩永はるみ

この句は何と言つても、「すれちがふ子に日の句」の描写がいい。ことに「日の句」に、明るい活発な子供の動きが巧みに表現されている。

「山茶花」という、古くからある季語を、今様に、生きる現代俳句として表現したところが立派だ。